

JICA海外協力隊員が市長を表敬訪問

JICA（国際協力機構）の青年海外協力隊員として、アフリカ南部の内陸国ボツワナに派遣される井上日南子さん（志賀郷町出身）が4月12日、山崎善也市長を表敬訪問。同隊は、開発途上国で現地の人々と共に生活し、課題解決に貢献する活動を行っているもので、本市出身の隊員は11人目となります。井上さんは2年間、現地の住民や生産者グループとともに、商品管理や販路拡大などに取り組む予定。「人とのつながりを大切に、地域の魅力を伝える架け橋になりたい」と意気込みを語りました。



部活動地域移行の試験的实施スタート

市教育委員会は、市内中学校の部活動を地域のスポーツや文化芸術団体に委ねる「地域移行」を試験的に開始しました。陸上競技は4月13日から綾部高校グラウンド（岡町）で、バレーボールは4月14日から綾部中学校（宮代町）でスタート。開始初日には陸上競技に4人、バレーボールには17人の中学生が参加し、地域のスポーツ団体による指導を受けました。

今後は、地域移行の対象部活動を段階的に拡大することを検討しています。



色鮮やかな花壇やステージを鑑賞

「あやべ由良川花壇展」（市シルバー人材センター主催）が4月27～29日の3日間、青野町の由良川花庭園で行われました。27日には、花壇コンクールの表彰式を開催。小・中学校や子育てサークル、団体などが工夫を凝らして植栽した花壇67点から、10団体を表彰しました。

期間中は花苗や飲食の販売のほか、吹奏楽や太鼓の演奏、ダンスなどのステージパフォーマンスなども実施。訪れた人は、色鮮やかな花壇や熱気溢れるステージなどを楽しんでいました。

花壇は、6月中旬ごろまで展示される予定です。



春の上林を力走

「第2回あやべ水源の里トレイルラン」（同実行委員会主催）が4月14日、陸寄町の二王公園を発着点に開催されました。15㎞と50㎞の2コースに、昨年の第1回大会を上回る727人が国内外から参加。ランナーたちは、地元住民らの声援を受けながら上林の豊かな自然の中を駆け抜けました。最年少（15歳）の参加者で、15㎞のコースを完走した金田幸太さん（志賀郷町）は「シデ山山頂で見た景色がきれいだった。来年も出たい」と笑顔。同級生同士、誘い合っ出て出場した玉木千太郎さん（向田町）は「応援の声が温かった。ゴールまで楽しく走れた」と声を弾ませました。



春の一大イベント大盛況



あやべ丹の国まつり（同まつり実行委員会主催）が4月29日、市街地一帯で開催されました。京都府警白バイ隊のデモンストレーション走行や謎解き宝探しゲーム、各種団体のブース出店、鼓笛隊や吹奏楽の演奏、模擬店などさまざまな催しが繰り広げられ各会場は大盛況。多くの家族連れが、綾部の春の一大イベントを楽しみました。本市出身の社会人プロレスラーによるプロレスキッズ体験に参加した宮津市の寺尾翼君（8歳）は「直接プロレスを教えてもらって楽しかった」と笑顔で話しました。

田園回帰への流れ強く

移住者が過去最多に

昨年度、市の定住サポート総合窓口を通じて移住した人は36世帯82人。人数は、平成29年度の79人を超え、過去最多になりました。

移住相談も高水準

コロナ禍以降、地方移住への関心の高まりが続いています。同窓口への移住相談は、令和元年度が延べ707件だったのに対し、2年度は2714件と急増。以降も高い水準で推移し、昨年度は2455件もの相談が電話やメール等で寄せられました。

こうした中、同窓口では▽対面やオンラインでの空き家紹介▽就農・就職相談▽地域住民との顔合わせへの同行などで、本市への移住を考える人を後押し。きめ細かなサポートや、ホームページ等を通じて綾部での暮らしの魅力を

PRすることで、定住促進につなげています。

空き家の活用を推進

移住者の受け入れを加速するには、空き家の有効活用が鍵になります。市は令和4年度、市自治会連合会と共同で「空き家調査」を実施。調査結果を基に、空き家の売却や貸し出しを考えている持ち主に、空き家バンクへの登録を呼び掛けました。

また、空き家相談会を毎月開催。空き家が老朽化する前に、宅地建物取引業者や司法書士に相談できる機会を提供しています。空き家バンクへの登録は約80件。今後も、空き家を移住者受け入れの大切な資源と考え、掘り起こしを進めます。空き家の活用にご協力ください。空き家バンクに関する相談・問い合わせは定住・地域政策課(42)4270へ。

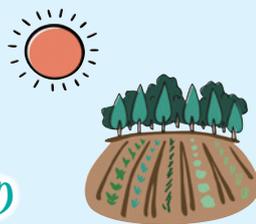
移住者 interview



人のつながり
心地良い

北島 武虎さん(西坂町)

2月に京都市から妻と2人で移住しました。綾部を選んだきっかけは、車の窓から見た田園風景。ドライブで丹後へ向かう道中に広がる景色が心に残っていて「どんなどころだろう」と興味を持ちました。その後、京都市のサテライトオフィスで移住相談をしたり、綾部市を実際に訪れ地元の人と交流したりするうちに移住を決意。引っ越してからは、周りの人がいつも何かと気にかけて声を掛けてくださり、ありがたいです。人の温かさや距離感が心地良く感じます。



親身な対応が
移住の後押しに



中澤 悠さん(上杉町)=写真右

自然に囲まれた里山での暮らしに憧れを抱いていました。そんな中、福知山市で古民家を購入した友人に触発され、物件探しをスタートしました。綾部市の空き家バンクの物件が目にとまり、昨年9月に妻と3人の子どもと舞鶴市から移住。市の担当の人が、親身になって住まい探しの相談に乗ってくれたことも決断の後押しになりました。移住を機に始めた農業は、近所の方が親切に教えてくれたり、手助けしてくれたりするので感謝しています。子どもも、広い敷地で伸び伸び過ごせて楽しそうです。